

コミュニティ計画論Ⅲ

— 地域における「音楽ボランティア」の活動を通して —

A Study on the Reconstructing the Community III

— Through the Activities of “Music Volunteer” in the Rural Area —

山 谷 敬 三 郎 村 井 俊 博*
Keizaburo YAMAYA Toshihiro MURAI

I は じ め に

近年の社会変化は急激な都市化が進み、その結果、人々のつながりや近隣との交流が弱まり地域の人間関係が希薄なものになり、社会全体に人間が疎外されたような風潮が漂いはじめ、必ずしも望ましいコミュニティづくりにはなっていない。また、核家族化の進行にともない「孤独な老人の死を周囲のだれも気がつかなかった」という悲惨な問題が示すように、高齢社会の中で、都会砂漠といわれるような孤立化の問題も絡み合い、人々の生き方が問われはじめている。

こうしたことから、地域社会に潤いを持たせ、人々が互いのつながりや触れ合いを大切にす
る人間関係を取り戻さなければならない。そのためにはコミュニティを確かなものに高めてい
くことが最も大切なことであり、それらを具体的に進めてくれる組織やグループの働きのある
ことが期待される場所である。

本稿では、地域でコンサートを開催して、人々の心を大きくつなぎ、地域づくりを進めてい
る幌加内町の「音楽ボランティアの会」の活動をもとにし、コミュニティを高めていく上での
地域活動のあり方を探るものである。

II 「音楽ボランティアの会」の誕生と公民館活動

地域づくりにかかわってのボランティアの活動は、実にさまざまなものがある。その中で地
域社会のコミュニケーションづくりのため、音楽を中心に活動を進めているユニークな実践に
ついて考えたい。

音楽には人々の心をつなぐ、より絆の強いものにするという大きな働きが存在する。
また、人々を信頼と友情にあふれた素晴らしい人間関係をも醸成してくれる力がある。それを、
コミュニティづくりの中で有効に活かしていくことが可能であることに着目し、幌加内町朱鞠
内地区では「音楽ボランティアの会」を結成し、活動を展開している。この「音楽ボランティア

*北海道女子大学生涯学習研究所研究員

の会」は、コンサートを開催するためのあらゆる条件整備につとめている。具体的には、開催されたコンサートを通じ「同じ場所で、同じ演奏を聞いた。」という共通の体験を通して、人々のコミュニケーションを高める場や機会を作っているのである。また、コンサートのPRに努めたり、お互いに会場へ誘い合う等の行動をとおして、あるいはその感想を交わす中で、次回への評価として生かし、地域の人々の希望を把握していくことで人々との信頼を深め、次のボランティア活動が進められていくのである。

このように、地域の人々のニーズに応えたコンサートのステージを作り上げることが、人々の共通の興味や関心となり、コミュニティの成員としての意識が高まりつつある。

1. 朱鞠内地区公民館と「コンサート in 朱鞠内」

幌加内町朱鞠内地区は、幌加内町の中心である役場所在地から更に 35 km 奥地へ進んだ僻地に所在する集落であり、人口約 160 名、戸数約 70 戸、独居老人の多い、超高齢社会化集落となっている地域である。

平成 6 年 4 月、幌加内町朱鞠内地区公民館は同小学校と共催して、文部省の「学校週 5 日制研究校」の指定を受け、その実践事業として、また 1994 年の国際家族年記念事業の具体的な活動として「高橋司バリトンリサイタル」を開催した。それは文化的な行事と言えば「小学校の学芸会ぐらいしか無い」という声や、「文化的に恵まれていない。」「文化の灯が欲しい。」という地域住民の強い要望の声に応えての開催であった。

2. 第 1 回コンサートの反響

この地域としては初めての音楽を通じた文化事業であり、小学校体育館の会場には約 42 名の住民たちが集まり「寝たきりの老人以外は全員が集めたような感じであった。」という。

初めてのコンサートは、地域の人々に大きな反響を呼び「こころ豊かな気持ちで家路についた。」「深い感動を覚えた。」「家族的ないりサイタルだった。」「これからもこのようなコンサートを期待しています。」といった、たくさんの感想が寄せられ「今後もこのようなコンサートを継続してほしい——」という地域の人々の強い希望があることがわかった。

3. 地区公民館「音楽ボランティア養成講座」

今後、継続してコンサートを行うには、参加者も特定の住民ではなく、地域住民の手で企画運営をすることが必要であり、また、そうしなければ長続きしないとのことから、人材育成のために、コンサートの第 2 回目からは地域の有志にこのコンサートに協力してもらった。一方公民館講座「音楽ボランティア活動」を開催し、より広く人材を求め、コンサートの運営についての実践的な内容を中心に学習を進め、その養成を行った。公民館講座修了後は、ここで学習を深めた人達を中心となって「朱鞠内音楽ボランティアの会」が自然のうちに出来上がったのである。

こうして、これ以降は、この「朱鞠内音楽ボランティアの会」が中心となり「コンサート in 朱鞠内」が毎年開催されるようになった。

III 音楽ボランティアの組織と役割

「音楽ボランティアの会」の誕生と共に、積極的にコンサートを運営するボランティアの方々の活動は地域の人々には、最初は驚きと好感をもって迎えられた。今までは、何か行事があっても、役場や教育委員会の方々が進めてくれていたことが、今度は地域の「音楽ボランティアの会」が中心になって、全てが進められてゆくことは「我々と同じ地域の人達でも出来る。」という、地域全体への活性化を促し、地域の人々への自信につながったのである。

1. 「朱鞠内音楽ボランティアの会」の組織化

地域に「音楽ボランティアの会」を組織するに当たっては、公民館講座の修了者が中心となっていた。それは「自ら学んだことを、地域の中で活かしていくこと」という生涯学習の目標を実践していきたいという考えからであった。

発足当時の会員は、自らの力で新しい「活動」をすることに、大きな期待と、若干の戸惑いを感じながらも、勇気を持って取り組んでいたと思われる。その決意の一つの現れとして次の表1のような会則を決定している。

表1 「音楽ボランティアの会」の会則

朱鞠内音楽ボランティアの会会則	
第1条	この会は、朱鞠内音楽ボランティアの会と呼びます。
第2条	この会の目的は、地域の音楽文化の振興と普及に当たります。
第3条	この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行います。 (1) 地域の音楽会の主催・後援・協賛等 (2) 地域の音楽活動の実施・協力・支援等 (3) 会員の研修・親睦行事の開催 (4) その他必要と認められる事項
第4条	この会の会員は、公民館講座「音楽ボランティア活動」修了者及びこの会の目的に賛同する者をもって組織します。
第5条	この会は、次の役員を置きます。 (1) 会長1名（会を代表し総括）～事務局を会長宅におきます。 (2) 総務1名（会の活動を計画・実施） (3) 会計1名（会の会計事務） (4) 書記1名（会議や活動を記録） (5) 広報若干名（事業等の具体的な活動）
第6条	役員は総会で選出し、任期は1年とし、再選は妨げない。
第7条	役員補充は役員会で行い、任期は前者の残期間とします。
第8条	この会の会計は、会費・助成金・寄附金等をもって当てます。
第9条	この会則の改廃は総会で行います。
第10条	この会の会計年度は4月1日から翌年3月31日とします。
第11条	この会則は平成6年10月24日から発足します。

2. 「音楽ボランティアの会」の役割

「朱鞠内音楽ボランティアの会」は、地域で「良い音楽を・・・」という期待に応えるように、地域の音楽環境を整えたり、音楽仲間を増やしたり、地域で開催されるコンサートの運営を行ったりと、今では地域には無くてはならない存在となっている。ここでは「音楽ボランティア」が最も活躍する「コンサート in 朱鞠内」での役割をあげてみたい。

(1) 「音楽ボランティアの会」の活動

「音楽ボランティアの会」の活動は、日頃から音楽に対する地域の関心を高めたり、音楽の愛好者を増やすよう、地域住民に対し、種々の音楽情報を提供することである。例えば、地域の子供たちが通っている音楽教室やピアノ塾等が開催する発表の機会や場を地域に知らせたり、地域に住む老人クラブの皆さんを招待する等、近隣で開催される音楽に関する催しものの紹介など、住民へ身近かな情報を提供し、音楽的な環境作りを進めていることである。

このように、近隣の音楽情報を住民に提供し、さらに自ら開催する「コンサート」の充実を期しての活動が、この地域全体の音楽文化の向上を促しているのである。また、こうした音楽ボランティアの活動は、毎年継続されている「コンサート」の聴衆の音楽鑑賞マナーの向上や参加者の拡大につながっており、大きな成果を上げていると言える。

以下、具体的な活動内容をあげることにする。

(2) コンサートの企画

- ① 公民館長との打合せ会議（コンサートの概要を決定）
- ② 役割分担をする（音楽ボランティア打合せ）
- ③ 事前の作業の推進（プログラム作り等）
- ④ 事前の広報活動（PR～ポスター・チラシ・回覧板・くちコミ等）

(3) 会場づくり（準備）

〔演奏会場〕

- ① ステージ作り（ピアノをステージに移動・コンサート名表示等）
- ② 聴衆の座席椅子の整備（コンサート予想数）
- ③ 入場受付席の設置
- ④ 放送機器の調整とブザーの設置
- ⑤ 贈呈用花束準備（地域ボランティアへ依頼）
- ⑥ 会場入口の表示

〔演奏者控室〕

- ⑦ 座布団及び椅子（関係者人数分）
- ⑧ お茶及び冷水、茶碗及びコップ、おしぼり（関係者人数分）
- ⑨ 演奏者用軽食（演奏前の夕食）準備～おにぎり等軽食を調理する。

(4) 会場運営

- ① 受付（入場案内・プログラム・アンケート用紙・全員合唱用楽譜等の配付）

- ② ブザー（予鈴～開演5分前と開演時の2度。第2部も同様）
 - ③ 照明（演奏中はステージを明るく，客席は薄明）
 - ④ 放送（機器整備と調整・アナウンス）
 - ⑤ 司会（開会，主催者紹介，演奏者紹介，曲目紹介等）
 - ⑥ 花束贈呈（演奏者等への花束贈呈）
 - ⑦ 参加者アンケートまとめ
- (5) 会場あとかたづけ
- ① ステージ（ピアノ・コンサート表示の撤去）
 - ② 聴衆用椅子（所定へ収納）
 - ③ 放送機器とブザー（調整と撤去）
 - ④ 会場入口表示（撤去）
 - ⑤ 演奏者控室のかたづけ
 - ⑥ 会場全体の清掃等
- (6) 演奏者と音楽ボランティアの交流
- ① 演奏者への慰労（音楽ボランティアとしてのお礼）
 - ② 演奏者からの地域や聴衆の印象や感想
 - ③ 音楽ボランティアから当日の演奏の感想と反響
 - ④ これからの地域文化のあり方について
 - ⑤ これからの音楽ボランティアの活動方向について
 - ⑥ その他，音楽情報等の交換
- (7) コンサート終了後の事務処理
- ① 公民館長（教育委員会）への報告
 - ② 演奏者へのお礼状の作成と発送
 - ③ 関係者へのお礼状の作成と発送
 - ④ 後援や共催者へのお礼状の作成と発送
 - ⑤ 関係帳簿，会計の事務整理
 - ⑥ 記録・アンケートの整理等

IV 「コンサート in 朱鞠内」のあゆみ

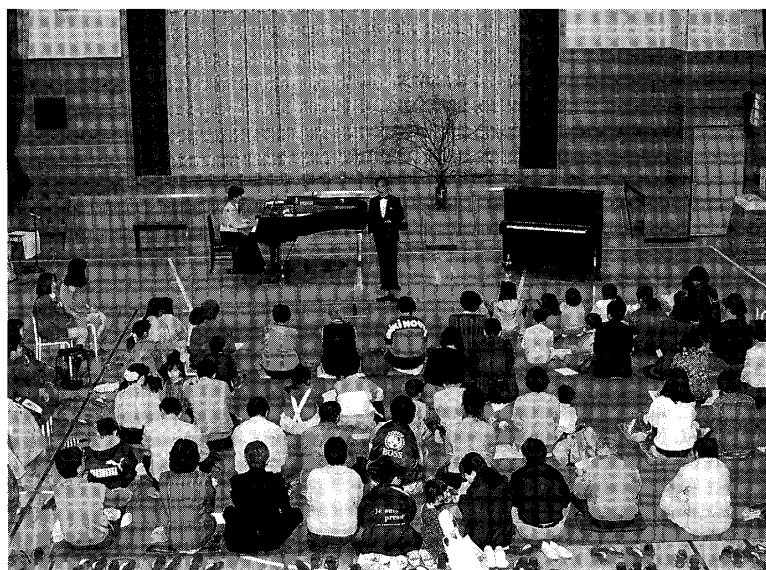
「コンサート in 朱鞠内」は，まだ歴史は浅いが，以下の一覧表によってその活動を概観してみよう。一覧表は第1回から，第8回までのコンサートで演奏された曲目，参加人数，そして，「音楽ボランティア」が，それぞれのコンサートでどのような活動を行ってきたかを中心にまとめられている。なお，写真は第1回の「コンサート in 朱鞠内」の様子である。

表2 「コンサート in 朱鞠内」のあゆみ

第1回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成6年4月23日(土)	42名
<p>～高橋司バリトンリサイタル～ ピアノ 高橋美智子 — 日本の歌・世界の歌 — ・この道 叱られて 荒城の月 ・エーデルワイス ラルゴ 等13曲 ・ピアノ プレリユード 等4曲 賛助出演 塩野真代</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 この時は、初めてのコンサートだったので、まだ活動は無かった。幌加内本町・政和・添牛内・母子里地区からも参加あり。 「このコンサートを継続して欲しい」との要望が多数出された。 ・幌加内町広報誌（表紙） ・北海道新聞掲載</p>	
第2回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成6年9月8日(木)	49名
<p>～小林薫ソプラノリサイタル～ ピアノ 坂本篤子 — ミュージカルの世界 — ・サウンド オブ ミュウジック ～ドレミの歌 ・イエスト サイド物語～トウナイト ・日本名歌曲集～浜辺の歌 荒城の月 ・世界の子供～友達讃歌 等17曲</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 このコンサートから、運営の協力者として受付や片付けを行う。 音楽ボランティアの必要性が認められる。 このあと公民館で「音楽ボランティア養成講座」が開催される。 ・北海道新聞掲載</p>	
第3回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成6年11月5日(土)	52名
<p>～橋場多恵子ピアノリサイタル～ — 山間にショパンの調べを — ・ピアノとともに メヌエット アラベスク 等5曲 ・ショパン作品集 エチュード ワルツ 等6曲</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 「朱鞠内音楽ボランティアの会」正式発足 平成6・10・24 この回から、音楽ボランティアが本格的な活動を始める。会として、会場作成・受付・片付け・放送等を担当する。会員6名が活躍 ・北海道新聞掲載</p>	
第4回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成7年9月16日(土)	51名
<p>～美しい音楽の夕べ～ 田村幸男&浅井万紀子ジョイントリサイタル ・ギター名曲集～禁じられた遊び等 ・ピアノ小品集～エリーゼの為に等 ・サクソフォオーンのしらべ～赤い靴・月の砂漠 等全14曲</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 この回から音楽ボランティアの会がいよいよ独立して歩みを始めた。演奏者の送迎も含めて、会場作成から、コンサートの一切の終了まで、会の活動として進めることが出来たことは、会の成長の為にも大きな成果があった。会員5名が、それらの任にあたった。 ・北海道新聞掲載</p>	
第5回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成8年9月15日(土)	52名
<p>～マンドリンオーケストラの夕べ～ ・日本の調べ ・世界のしらべ 演奏者総勢 35名 指揮 石井邦紀</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 会場作成・演奏者歓迎・受付・放送・司会後片付け等を行う。 はじめて大勢のメンバーによる演奏に酔いしれていた。 会員6名が、それらの任にあたった。</p>	

第6回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成9年9月13日(土)	54名
<p>～吉田マナバイオリンリサイタル～ ピアノ 三津橋珠子 — 珠玉の名曲のしらべ — ・トロイメライ 白鳥 ・ガボット 金婚式 ・G線上のアリア 等 11曲</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 会場作成・演奏者歓迎・受付・放送・司会后片付け等を行う。 会員7名が、それらの任にあたった。 子供たちへの出演について検討し、《地域の子供たちの演奏》の人選を行った。 ピアノ：大坊 円（6年） 矢作優佳（6年） 山口歌織（6年） 以上3名 ・北海道新聞掲載</p>	
第7回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成10年8月6日(土)	52名
<p>～オペラの楽しみ～ — カルメン（ビゼー作曲） — 出演：空知音楽教育連盟会員 ・田村貴美子（滝川江陵中） ・中田晶子（滝川開西中） ・三津橋珠子（妹背牛中） ・寺西理恵（浦臼中）他3名 全 18曲</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 演奏者の送迎も含めて、会場作成から、コンサートの一切の終了まで、会の活動として進めることが出来たことは、会の成長の為にも大きな成果があった。 会員7名が、それらの任にあたった。 《地域の子供たちの演奏》の人選 ピアノ：佐藤あかね（3年） 矢作友佑（3年）</p>	
第8回コンサート in 朱鞠内	開催期日：平成12年1月7日(土)	(予定)
<p>～童謡を歌おう～ — メルヘンの世界を楽しむ — 赤い靴 花かげ 花嫁人形 作曲集から等 全 15曲 お話し 村井俊博 ソプラノ 中田晶子 ピアノ 寺西理恵</p>	<p>【音楽ボランティアの会】 コンサート一切の運営を音楽ボランティア会が行う。会員が9名に増える。 《地域の子供たちの演奏》の人選 ピアノ：竹脇結衣（6年） 山口裕美（6年） フアゴット独奏 山口陽慈（高校3年）</p>	

写真1 「コンサート in 朱鞠内」



V 音楽ボランティアとコミュニティ

「音楽ボランティアの会」の活動は、その目的である「音楽の振興と普及」ではあるが、その活動を通して生まれるてくるコミュニティづくりとしての働きを考察する。

1. コンサートの開催の継続

この地域で毎年コンサートを開催することは大変困難を伴うことである。しかし、意欲的に継続して開催していることは、それだけ住民の文化を求める気持ちが高いことを示すものであり、その気持ちに応じてコンサートを継続している「音楽ボランティアの会」の情熱もまた、あふれる思いが現れている。こうした相互の目に見えぬ連携が、継続を可能にしているのである。また、住民もボランティアをよく支えており、互いの作用が働いて、コミュニティとしての高まりが住民に育ちつつある。

2. 住民参加のコンサート

「音楽ボランティアの会」の企画には、住民はただ聴衆として消極的な姿勢で鑑賞するのでは無く、聴衆も演奏者同様に積極的に参加出来るよう配慮したプログラム作りを行っている。

(1) フィナーレの全員合唱

コンサートの前半と後半の中間に若干の休憩時間を取り、この時間を利用して会場に集まった住民と、フィナーレに歌う合唱の練習をしている。その曲の一つは「仰ぎ見る（上元芳男作曲）」を入れている。この曲は、地元の小学校の校歌であるが、地域の歌としてすっかり定着しており、演奏者も聴衆もこのコンサートの会場で全員合唱するなかから、地域意識が高まりこれが地域住民の一体感を生み出し、コミュニティの成員としての意識の高まりへとつながっているのである。

(2) 地元子供たちの演奏等の参加

第6回目のコンサートから、賛助出演者として地元の子供たちによる演奏も加えている。演奏者のほとんどが、外部から来ることから、少しでも身近なコンサートとなるような配慮からこのプログラムに加えた。これが子供達へは発表の場の提供となり、聴衆にはちょうど良い導入となって、コンサートを一層リラックスして聴くことにつながっている。

また、プログラムの演奏が終了した時点、演奏者達の労をねぎらって、子供たちの代表から花束の贈呈をするが、地域の子供たちの参加もこういう形で実現し、聴衆ともども満足していた。このように会場が和気あいあいのうちに進み、最後のフィナーレの大合唱で終わる頃には会場全体が感動の最高潮に達しているのである。

(3) コンサート会場でのアンケート調査

コンサート会場の入口で、アンケート用紙を配付し、コンサート終了後に回収し、その結果をまとめて、次年度の計画に活かしている。内容は、今回のコンサートの感想や、次回への希望を訊ねたものであるが、次回の計画に活かされる事を知っているために、記入は丁寧であり回収率は殆ど100%である。この姿勢にもコミュニティの意識の高さが伺え、「音楽ボランティ

ア」の日頃の活動の成果と伺える。

3. 親しみのあるプログラムの作成

コンサートでは、聴衆に馴染みのある曲を、なるべく多く演奏されるように配慮している。

これは「曲が難しすぎてわからない」というものでは、コンサート全体への親しみが薄れてしまうことになりかねないので、必要に応じて解説を入れたり「どこかで聴いた」という印象の曲を取り上げ、心から楽しんで鑑賞出来るように配慮している。

コンサートで、自分の知っている曲が演奏されると、ぐんと親しみが増してきて、楽しい気分で鑑賞してくれるからである。そのことも大事な配慮事項として、演奏者と打ち合わせる時に、十分こちらの希望を伝え、協力してもらっている。

ピアノ独奏では「エリーゼのために」(ベートーベン作曲)「トルコ行進曲」(モーツァルト作曲)「子犬のワルツ」(ショパン作曲)など、バイオリン独奏では「ガボット」(ゴセック作曲)「金婚式」(マリー作曲)など、ソプラノやバリトンの独唱では童謡や有名な日本の歌曲等を歌ってもらうなど、皆が共通して鑑賞出来るような曲目の選定に心掛けている。

4. 文部省唱歌「ふるさと」を全員合唱で

現在、老人から子供まで、一緒に歌える歌を挙げることは難しい。そこで「ふるさと」を取り上げてみたい。これは、老人達もよく知っている曲であり、子供たちも学校で習う(6年生教材)ので歌えるが、このように老人から子供たちまでの共通に歌える歌は他に見当たらない。それほど世代間の共通点を探すのは困難な時代といえるのである。

世代間の共通な意識や感覚がなければ、コミュニティは成り立ち難いものがあり、逆にいえば「この地域に生きている」という思いや自覚が深めることからコミュニティは成り立つものとする。そういう意味では「ふるさと」は、コミュニティを育てる歌として相応しい歌と考える。

写真2 「ピアニスト」の伴奏で参加者全員が合唱(フィナーレ)



Ⅵ 音楽ボランティアの成果

「音楽ボランティア」の活動を通して、その中で学び合っていくものは実に多い。そして、その活動の中から「文化事業」を成し遂げたという喜びと自信が、次への学習行動へとつながっている。それらの具体的な活動の成果を、会員が活動から得た成果、あるいは地域のコミュニティ活動から見た成果を、以下で考察したい。

1. 会員が活動から得た成果

(1) 学ぶことと行うことの楽しさ

かつては、いろいろな文化的行事は、全て町役場や町教育委員会がその中心になって行ってきた。しかし、自分たちで取り組むことが出来ることを学び、それを実際に行い、その中から更に次の課題へ取り組んで行くという形で、積極的に学習を進め「学びながら行う」という生涯学習を行っていることは、他のモデルケースとなっている。

(2) 学んだことの社会への還元

学んだことを、自らの知識・教養としてだけでなく、それを日常生活に活かしたり、積極的に社会へ還元して行くことは、生涯学習社会の望ましい姿である。ここでは、それが素朴な形ではあるが、しっかりと実現されている。

(3) 人の輪のつながりと広まり

コンサートを開催することによって、地域へやって来た演奏家との交流の機会が増えて、だんだんとそうした人々のつながっている世界へと、人の輪が広がっている。また、コンサートを聞きに、他地域からも人が集まってくることから、それらの人とも交流が深まり、ますます地域が活性化してくる。

(4) 文化的な活動への意欲の高揚

「文化的なことが少ない……」といった地域の人々が抱いていた気持ちも、このコンサートを継続していくことによって「文化活動を一層活発にする。」という住民の意欲と他の文化活動への啓発となって、地域全体の高揚につながっているのである。何よりも、地域の人々に「同じ仲間がやっているのだ」という安心感や自信を与えた事が、地域全体に受け入れられた。

(5) コミュニティづくりへの貢献

このコンサートには、病気や老衰等で会場の来るのが困難な人以外、地域住民のほとんどが参加している。地域の人々が同じ音楽を聴いて、一緒に感動している。そこには男女や年代の区別は無く、その町の人として共通の立場にある。その中で、人々は「同じ地域に住む人」としてのつながりや深まりを感じているのであるがそれがコミュニティとしての基盤を醸成している。特に、プログラムの中間の、休憩時間を利用した「皆で歌おう！」のコーナーで、フィナーレで歌う歌を練習し、プログラムの最後に全員合唱を取り入れることが、参加者、ひいては地域住民の連帯感を醸成する効果を上げている。

2. 地域から見た「音楽ボランティア」の成果

(1) 「生」で聴く音楽と僻地性の克服

僻地といわれる地域に住む人々が、美しい音楽を「生」で聴けることに、おおきな喜びを持っている。

札幌や旭川と言った都市へ出掛けるばかりでなく、この地においてもこうして文化的な香りのするコンサートが聴けるということは、僻地性に対する意識の解消にも役立っている。

すばらしい音楽に感動

R S

山間の小さな集落に響きわたる 美しいハーモニーの演奏
ほのぼのとした雰囲気の中で みんな心温まる演奏に聞き入っている
毎年 楽しみにして待っている 「コンサート in 朱鞠内」

地域の子供たちも 音に目覚め 音に触れ レッスンに通っている

地域の皆が「素晴らしい演奏を、気軽に参加出来て夢のよう……」
と、感動している。

本町 政和 添牛内 母子里地区からも参加している —

(2) コミュニティづくりのひろがりや深まり

共通した話題を中心にした世代間交流や、近隣の人々とのつながりを深めることが、コミュニティ活動の支えとなり、人々の心と心を結びつけることにつながる。下にあげた感想はまさに、そのことを示している。このように、このコンサートを毎年継続して行くことが、コミュニティを高めていくのである。

全町への広がりを

K H

「コンサート in 朱鞠内」へ本町から参加させていただきました。とても素晴らしい企画で、感激しております。私は、午後6時の開場と同時に入場し、参加者第1号でした。今日は「本町のお祭りの行事と重なっている日なので、入場者は極端に少ないのでは無いか」と、思いました。

しかし、その心配をよそに、次々と子供から大人まで、そして多くの家族が参加さ

れ、用意された椅子はたちまち一杯になり、たくさんの椅子が追加されました。演奏中は、美しいソプラノの歌声に、会場全体がすっかり心地よい雰囲気にも包まれていました。また、休憩時間に行われた「皆で歌おう！」のコーナーも楽しいものでした。

今回参加された皆さんが、それぞれの家庭で「コンサート……」という共通の話題を中心にし、親子や世代間の交流が深まり、それが地域へ、全町へと、大いに広がりを見せて欲しいと願っております。ありがとうございました。

(3) ピアノ教師の協力と子供たちの出番

政和地区でピアノを教えている先生が、この「コンサート」を全面的に支援し、協力してくれていることは、音楽ボランティアにとっては大変心強いものになっている。また、地域の子供たちが、何人かその先生に習っていることから、これらのコンサートの賛助出演者としてコンサートの前段で演奏する機会を作っているが、これがコンサートの全体を家庭的なすがすがしいものにしており、子供たちの活躍の場ともなっている。このほかにも小学生全員がステージで合唱したり、得意の楽器を演奏するなど、子供たちもコミュニティの一員として活動しているのである。

(4) 地域の活性化と他文化活動への発展

「コンサート in 朱鞠内」が、毎年継続して開催されるようになったことは、困難と思っていたことも「自分たちでも、やれば出来るのだ」という自信と勇気を地域全体の人々に与えた。このように「音楽ボランティアの会」の活動の継続に啓発されて、地域にアコーディオン、ビブラフォン、シンセサイザー、ピアノ、ベースギター、ドラム等の10名編成の器楽合奏団(楽団)が編成された。名称も「朱鞠内ニュースターズ」として、童謡、唱歌、愛唱歌をはじめ、地域の歌として「朱鞠内旅情」「幌加内町歌」等を得意のレパートリーとしている。近年はレパートリーも増え、一層地域から支えられている。

また、この時期に朱鞠内女声合唱団「コール・レイク」(12名編成)も誕生した。この合唱団は、楽団「朱鞠内ニュースターズ」との共演を中心に活動してきた。

これらの楽団や合唱団は、幌加内町文化祭や地元の朱鞠内小学校の学芸会、あるいは地域行事に出演し、好評を得ていて、地域の音楽団体として活躍している。

このほかにも、老人クラブ等が啓発され、発展的な文化活動を展開している。このように「音楽ボランティア」が、地域に与えた影響力は大きい。

(5) コミュニティの高まり

地域の人々が、こうしたコンサートに集い、挨拶を交わし、それぞれが交流していく中で相互の信頼感が深まり、地域の連帯感が醸成され、コミュニティとしてのつながりが次第に高められている。そこに、この「コンサート in 朱鞠内」がコミュニティづくりに果たしてきた大きな意義がある。

VII おわりに

「音楽ボランティアの会」が、地域の中で活動することによって、地域の様々な場面で地域全体のコミュニケーションが深まり活性化してきている。人々の意識が多様化してきている今日では、こうしたグループやサークルといった比較的小さな組織であっても、それが果してくれる働きが大切となる。行政主体だけではなく、自主的な集まりであるこのような小さな団体こそ、活動しやすいのではないかと考える。

今回は小さな「音楽ボランティアの会」の活動を通して、コミュニティを高める方法を考察したが、こうした小さな実践でも、そのコミュニティにとっては、非常に大きな良い影響を及ぼしているのである。

参 考 文 献

- (1) 村井俊博「朱鞠内地区公民館の活動」 株式会社ナカバヤシ 平成7年3月
- (2) 倉熊進「コミュニティ論」 放送大学教育振興会 1998
- (3) マッキーバー 松本・中 訳「コミュニティ」ミネルバ書房 1975
- (4) 松原治郎「コミュニティの社会学」東大出版会 1978
- (5) 山谷敬三郎・村井俊博「コミュニティ計画論Ⅰ」北海道女子大学短期大学部「研究紀要第35号」
1998
- (6) 山谷敬三郎・村井俊博「コミュニティ計画論Ⅱ」北海道女子大学短期大学部「研究紀要第36号」
1999